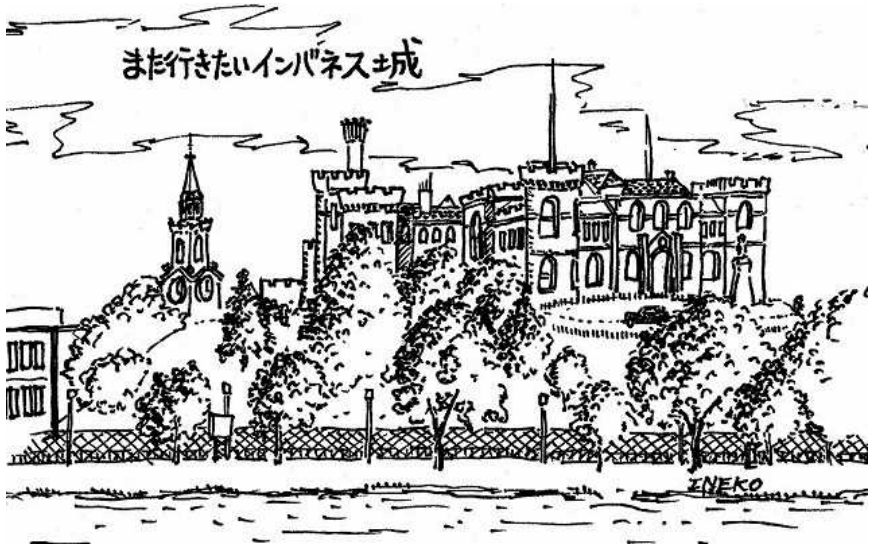




う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2021年10月
第122号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩 (59)	(岡田健嗣)	1
岡田メモについて	(岡田健嗣)	5
点字から識字までの距離 (115)	(山内 薫)	12
わたくしごと	(木村多恵子)	15
漢文のページ		19
ご報告とご案内		21
編集後記	(木下和久)	23

漢点字の散歩（五十九）

岡田 健嗣



カナ文字は仮名文字（10）

『台湾万葉集』という歌集が編まれて、我が国に紹介されてから三十年を超える年月が経ちました。日清戦争によって我が国の植民地となった台湾に生まれ、強いられた日本語教育のもとに植民地教育を受けて成人となり、第二次世界大戦の終戦を迎え、大陸の国民党軍の敗北の結果として、島に渡ってきた国民党の支配を受けることとなった台湾の人々の心の歌として、植民言語である日本語で、日本の歌謡である「和歌」（短歌）を詠もうという方々が、これほど数多くおられたということは、驚きのほかありません。恐らくここに歌を寄せられておられる方々も、決して日本語を手放して受け入れておられるのではないであろうことは、想像に難くありません。にもかかわらず、このように「和歌」の形式で心の内奥を詠われるということを思いますと、言葉というものの中に、不可思議

な力が蔵されていると思わざるを得ません。

現在では、外国人の方々が日本語で文学作品を著すということは決して珍しくなくなってきた、何人もの方々が文学賞を受賞されておられます。このことは、日本語が国際化してきたと、これまた手放しで喜べることも言い切れないことではないか、私にはそう思われます。単に日本語の上手な外国人の方が増えてきたというのとは少し違う、確かに外国語の訛りのない日本語を話される外国人の方が増えてきて、相撲の解説などで、何方の解説かお名前を聞かない内は、外国人の方だということに気づかないということもあります。勿論このような変化が、世界的に日本語の裾野を広げているのかもしれませんが、しかし「和歌」を作ったり、日本語で文学作品を著したりということは、私の知る限りの日本人が外国で暮らすというのとは少し違うのかなと思われます。しかしながら現在では、外国に住んで、外国語で作品を著しておられる日本人の方も、決して少なくないということを、思い起こしております。恐らく外国人の方々が、日本語に向き合っ、日本語でもを書くということと、日本人が外国に住んで、その場所の言語でもを書くということ

の中には、共通する困難さや克服すべきプロセスがあるのかもしれないませんが、日本人である私が、外国人の方が書かれた日本語の、それも文学作品を読んで、日本語の作品として鑑賞できるということは、とても新鮮であり、不思議な感興を催させられます。

しかし一般論として、日本語は外国人にとつて難しい言語だと言われきました。が、どうもそうではないのかもしれない、そんな風にさえ思われて参ります。

しかしここではつきりしていることは、日本語で「和歌」を詠み、日本語で文学作品を著すということは、それを試みられる皆様は、取りも直さず日本語の表記法を我が物にしておられるということに他なりませんし、日本人一般よりは遙かに、日本語の達人と言わなければならぬほどの使い手であることは申すまでもありません。日本語の表記法と言えば、「漢字仮名交じり」という方法です。

確かにこれまでも、日本語を流暢に操られる外国人の方々には、どこかで漢字をマスターし、かな文字とともに「漢字仮名交じり」文を読み書きしておられましたし、そのような方が、「漢字は確かに取っ付き難い

文字ではあるが、理解してしまえば大変分かり易い文字だし、日本語も漢字さえ分かれば、決して難しい言語ではない」ということを書いておられたことを覚えております。つまり外国人の方が日本語を習得される場合、まずは話し言葉を習得し、その次に文章言語を習得するという二段階のプロセスを踏まなければいけないということなのでしょう。そして文章言語を我が物にできれば、ほぼネイティブ・ジャパニーズと遜色のない日本語の使い手となり得るということなのです。

そういう中、ネイティブ・ジャパニーズであるわが国の視覚障害者が、なぜ「漢字」の世界に触れられないのか、その辺りを考えたいと思い、本稿に筆を染めました。

約五十年前に、故・川上泰一先生によって、点字の漢字体系である「漢点字」が世に問われました。私はそれを習得して初めて漢字の世界を知ったのですが、五十年経っても、この「漢点字」の普及は見られません。

なぜに普及しないのか、そう考えながら視覚障害者

ます。

日本語の表記がなぜ「漢字仮名交じり」の形に定まったのか、『万葉集』を読みながら考えて参りました。どうしてもかな文字だけの表記にはならず、「漢字仮名交じり」にならざるを得なかったには、何か理由があるはずです。

このように考えている内に、幾つかの私の勘違いに気づかされたのでした。今から思えばこれは勘違いというしかないもので、このバイアスの強さから、中々理解が進みませんでした。

第一の勘違いは、わが国の言語を表記する文字は、「かなもじ」から始まったものではないということだ。視覚障害者の中の声である「なぜかな文字だけで表記するようにしてくれなかったのか？」というものは、言い換えれば、「かな文字があるのだから、漢字を使わずに表記できるはずだ！」という考えがあるのです。つまり漢字よりかな文字の方が先にあるのだから……というものです。

しかし常識的に言って、これは全く誤りです。

の内に耳を傾けておきますと、「日本語の表記をなぜかな文字だけでできるようにしてくれなかったのだろうか？」という声が聞こえてきました。しかもこういうことを言われる人が、大変多いのに驚かされたことがあります。また思い返せば、私の出身の盲学校では、晴眼者の先生方から、「漢字を覚えておかないと、社会に出てから大変だぞ」などという言葉を何度も聞かされていましたが、後になって確かにそれは真実だということをもっと知ることになりました。それとともに、そういう言葉をかけて下さった先生方も、私どもに、一度も漢字の教育を施そうとされなかったことも思い起こされましたし、その先生方と一緒に教壇に立つておられた視覚障害者の先生が、漢字の勉強をしておられるということもなかったということも思い起こしたのでした。

情況は私が盲学校に在学していたころと、どうやら変化していないようです。勉強しなくて済むなら苦勞して勉強したくない、というのがどうやら盲学校、そして視覚障害者の福祉に関わっている施設と職員を覆っている「空気」だと言ってよいように思われており

かな文字は「仮名文字」と書かれます。またそれは「ひらがな」と「カタカナ」の二種があります。現行の日本語の表記は、この「ひらがな」と「カタカナ」、そして「漢字」を組み合わせて表記されますし、それぞれに役割を分担しております。

第二の勘違いは、『万葉集』は日本語で書かれている書物だということですが、これも大きな誤りでした。

これを言うなら、『万葉集』は、日本語の表記の始めの書物である、となります。また当時ほぼ完成していた漢字の「訓読」も、日本語の表記のために考案されたものではありません。あくまで「漢文」を如何に読み下すか、というために編み出された方法だということですが。

『万葉集』も、決して日本語で書かれた書物ではありません。歌の部分以外、題詞や左注は、漢文で書かれております。日本語の表記の試みは、歌謡に始まったということができましようが、しかしその表記も、「日本語の表記」ではなく、「漢文の読み下し」を日本語の表記に応用したというのが適当な表現ではないかと思われまます。

時系列で申せばまず、「略体表記」と呼ばれる助詞・助動詞・送り仮名を抜いた、訓読される漢字を並べたもの、漢文によく似た形式ではあります。語の並びが日本語のものになっております。次に「常体表記」と呼ばれる、「略体表記」の漢字の間に助詞・助動詞・送り仮名を音仮名・訓仮名で挿入したものです。最後に音仮名だけの総仮名で書かれたものの順で、「和歌」が表されます。

そして日本語の表記は、平安時代に入って、仮名文字の表記の隆盛を迎えます。いわゆる王朝女流文学です。当時の作品は仮名文字だけで表されていたと言われますが、現在私どもが読んでいる王朝文学は、仮名文字だけで書かれてはおりません。しかも仮名文字も、現在ではひらがな・カタカナの形が定まっていますが、当時の仮名文字は、多様な書体が乱立している、一つの音を表すのに、幾つもの仮名文字が当てられていたと言われます。

そのように表記された文章を、より読み易くする努力がなされて、現在に残る王朝文学が存在してきたというのが真実のようです。印刷技術のないころから書

写が繰り返されてきて、その都度表記が改められて、現在読んでいる「漢字仮名交じり」の文学が成立してきたというのが真実のようです。そこには、この仮名文学の流れである「和文脈」と、中国から渡ってきた漢文を読み下した「漢文脈」の流れがあつて、「和文脈」は、いつでも「漢文脈」から創意を借りながら、表現の工夫をしてきたと言ふことができます。そして明治に入つて、欧文脈の流入とともに、日本語の表記法の大改革が行われて、いわゆる「言文一致体」と呼ばれる文体が成立して、現在に至っています。

このようにして日本語の表記が「漢字仮名交じり」の形を取っているのですが、従つて視覚障害者の、またその周辺の人々の言うような、「かなもじだけの表記」は、その実現の余地はなかつたということになるのではないでしようか。このことを、視覚障害者がわが国の文化を享受しようとするならば、真剣に問い直す必要があるのではないかと、私は思っております。

私は漢点字を使用して漢字の世界を知ることができました。このことによつて、手応えのある人生を歩ませていただいたと思っております。そのことを他の視覚障害者の皆様にお伝えできたらと思っております。

岡田メモについて

岡田 健嗣

1. 岡田メモとは

この『常用字解』という書物の音訳版を作ろうという活動が開始してから、予想はしていたとは申ししても、無から有を生み出すとでも申しますか、あるいはどこから手を付けてよいか分からないと申しますか、五里霧中、あるいは無我夢中の中に投げ込まれたような思いを味わつたのでした。これまでの音訳書の製作の経験に、範を問えないことばかりがこの中に幾つも存在することを、思い知らされたのでした。その一つがこの岡田メモの作成に結びついたものです。

『常用字解』という書物は、白川静先生が切り開かれた漢字学を、一般の私どもにも読み易く、また理解し易く著されたものです。しかし漢字についての解説書ですから、それを音訳するに当たっては、そこに説明されている漢字を説明するところから考えを始めるなければいけません。しかしながらこれまでの音訳の作業の中には、漢字の説明を施すことは極限られていて、しかもその説明の方法も、定まっていなかったこ



とに気づかされました。現在まで製作された音訳書では、どの文字を説明するか、またどのように説明するかは、音訳に携わっておられる音訳者に委ねられていて、その説明は音訳者によってまちまちで、また同じ音訳者・同じ書物の中でも、同じ文字の説明が、出て来る度に異なったものになっていることも珍しくありませんでした。そういう現状を顧みて、本書『常用字解』の音訳に当たっても、同様の状況が出現してはならないということ、音訳者の皆様と確認しました。

そこで私どもは、漢字をどのように説明するかというところから検討を始めました。漢字には「形・音・義」という三つの要素があると言われます。ともかくこの三つの要素を文字の説明の中に盛り込むことでそれが果たされるのではなからうかという考えが、まず浮かびました。

そこで私岡田が、音訳者の皆様にお示しし始めたのが、この「岡田メモ」です。名称は現在もそのまま使用しておりますが、その中身は、当初のものとは全く異なったものになりました。

2. 岡田メモのあらまし

このようにして文字の説明に当たって、「形・音・

義」の三つの要素をまとめて説明することが必要だということまで考えが及びました。そこで「形」の説明を加える方法を試してみました。が、「音・義」と共に行うと、説明が徒に長くなって、「音・義」も割愛し勝ちになることが分かり、またこの『常用字解』では、本文の中で字形の説明が重要な位置を占めていることから、「形」の説明は岡田メモには含めないことを原則としました。従って文字の説明としては、「音」と「義」とを組み合わせたものとなりました。

また従来の音訳では、その主たる目的は、その書物に著されていることを欠け目なしに聴読者の方にお伝えすることが求められていると考えて、また文字の説明はその範疇にはないものと考えて、できるだけ短い説明が望ましいと考えられておりましたが、音訳の作業を進めているうちに、日本語の表記の中に漢字の占める位置が思いの外大きいことを、また思い知らされることになりました。その書物の著すところを欠け目なしに伝えようとすれば、そこに使用されている文字についての情報も伝えなければ、伝えることにはならないということが明らかになって来ました。極端に言えば、出来得るならば、そこに使用されている漢字には、全て文字の説明を施すのがよいのではなからうか

と考えるに至ったのでしたが、それでは文章の音訳と
ならないことは言を待ちません。

そこで考え方として、従来行われて来た文字の説明
法である、対象とする文章の中から、説明を要すると
思われる文字を選出するのではなく、それとは逆に、
全ての文字に説明を施すものと前提して、その中から
説明を割愛してもよい文字を最大限引き出して、残さ
れた文字にその説明を施すという方法を採ることに致
しました。(もつともこのことは、従来の方法と同じ
ことを立ち位置を変えて見たもので、説明の可否もも
つと緻密に見定める必要がある、という意味です。)

3. 文字の説明の方法

この『常用字解』という書物は、漢字について解説
している書物ですので、その音訳に際しては、文字の
説明なしには音訳書として成り立たないことは誰しも
が想像できることでしょう。

しかしこのことは独り『常用字解』ばかりではな

く、どの音訳書にも言えることと考えます。なぜなら
ば、音訳とは、活字書を音声化して、録音媒体に記録
して、聴読者に供給されるもので、その元になる活字
書が漢字を用いて著されている以上、漢字を表現しな
いということは、その書物の大方が失われることだと
も言えるからです。活字書は文字で表されていて、本
来はそれを視読することで「読む」という行為を完成
させます。しかし音訳書の聴読では、活字を音声化し
た時点で、漢字という要素を失います。聴読では、
「読む」という行為を通じて、漢字から送られて来る
何かを、残念ながら受け取ることができません。

そこで考えますに、出来得るならば、音訳される際
に、活字書で著されている漢字全てを、何らかの形で
音声化するのが最もよろしいというのが私の基本的な
考えですが、それでは文章の音声化は成立しないとい
うのも事実です。そこで先にも申しましたように、こ
こでは最大限説明を必要としない文字を抜き出して、
残った文字にその説明を施すという方法を採ることに
しました。

どのように説明を施したか、困難な部分を挙げて、
ご紹介しますと、漢字には同音同義の文字も珍しくあ

りません。そういう文字であれば片方が淘汰されて消え去るのではと思われませんが、言葉というものの面白ところか、あるいは難しいところ・不可思議なところか、それぞれに残っていることがあって、それぞれに使用されております。限られた数の常用漢字では殆ど見られませんが、非常に身近な文字の中に一対あります。

「処」と「所」です。この二つの文字は、音読が「シヨ」、訓読が「ところ」です。音義も訓義もどちらもほぼ等しいようです。ここまでの説明ですとどちらの文字を使用するかは書き手の任意ということになります。ただしこの二つの文字の使われ方は別様です。この二つの文字は、歴史的にはともかく、現在では「ところ」と訓読されるのは「所」の方で、「処」と書いて「ところ」と読ませることは極めて希です。そこで岡田メモでは、義として音読の熟語を二つずつ使用することにしました。「処」では「処理」と「処分」、「所」では「所属」と「場所」を採用しました。

処　ところ・しより・しよぶんのしよ　処理・処分

所　ところ・しよぞく・ばしよのしよ　所属・場所

また音読・訓読が同じで、意味に相違のある文字があります。例えば音読が「カン」、訓読が「みる」と読まれる文字があります。「監・看・観」と、常用漢字ではありませんが「瞰」もそれに該当します。

このように挙げますと、視読される方にはその区別は明らかなことですが、聴読者には音読と訓読だけでは文字の違いが分かりません。言わば「みる」という訓読に、これらの文字で表されるだけの広さの意味の領域が存在していると言えます。これらの文字を岡田メモでは、

監　みる・みさだめる・かんとくのかん　監督

看　みる・みまもる・かんごしのかん　看護師

観　みる・かんねん・かんさつのかん　観念・観察

瞰　うえからみる・みおろす・ふかんのかん　俯瞰

としました。このように「みる」という和語の領域を漢字で表そうとしますと、「カン」の音読の文字だけでもこれだけ出て来ますし、他の音読の文字をも加えますと、十を遙かに超える文字が数えられます。言葉の世界・文字の世界はこのように、意味や読みが多層に重なり合ったり鱗状に重なり合ったり、またその領域の広さも形も、様々だったりします。

岡田メモの文字の説明の構成は、以上のように、原則として、「訓読」・「訓義」・「音読の熟語と音読」の三つの要素から成っています。原則として言うのは、文字の多くがこの原則に沿えず、「訓義」のところには色々な工夫をせざるを得なかったことによります。「処・所」のように、音読の熟語を「訓義」の代わりに入れたり、呉音が多く用いられる文字の場合には呉音の熟語を入れたり、あるいは訓読が幾つかある場合はその中から一つを選び出して入れたりしました。

音訳版の『常用字解』では、この岡田メモを事前に用意することができませんでした。そのためにいわゆる

る泥縄となつてしまいました。音訳はア行から順に進めて参りましたので、岡田メモもその進行に連れて変化してしまつたことも否めません。その辺りは極めて残念に思わずにはおられません。しかしこの音訳活動を通じて、漢字の説明について考える機会を得たことは、私にとつて大変貴重な経験をさせていただいたことと感謝しております。

この岡田メモは、現在でも決して完成したものとは申せません。多くの音訳者の皆様と聴読者の皆様のご批判を仰げれば幸甚に存じます。

補記

現在音訳の終盤に差し掛かっております『常用字解』は、画期的な方法で漢字を分析して、「漢字学」と呼ばれる学にまで高められた白川静先生が、私ども一般の者にも容易に理解できるように、平易な表現で表された書物です。漢字を説明する書物ですので、漢字の大きな要素である「形」は、この書物の主要な要点の一つとして、文字の説明の全てに取り上げられています。漢字の三要素である「形・音・義」を説明するには、まず「形」から、そして「音」、最後に

「義」の順にしなれば、説明にならないということが、この書物からよく分かります。それだけに「形」の説明も、避けては通れないものでした。

本会ではもう十年を数える以前に、この漢点字版を完成させておりましたが、この漢字の「形」をどう表すかというところが、漢点字版製作の大きな山でもありました。と申すのも、視覚障害者を対象としたものとしての、漢字に関しての先人の足跡は、一つも見いだせなかったからで、中でも漢字の「形」についての資料は、皆無と言ってよい状態だったからです。参考にしたくとも参考にすべき資料がなかったというのが現状でした。

そこで思い起こしたのが、かつて漢点字の創案者の川上泰一先生が、漢点字のテキストの中で、「漢点字は点字であるので、漢字の構成要素を全て点字に置き換えることはできない。どうしても省略したり位置を変えたりということをしざるを得ない。」と言われ、そこで漢点字を補う目的で、漢字の「形」を表すために、「字式」という方法をご提案になりました。テキストでは、その方法も極めて初期的なもので、文字

の構成要素を大きく、縦の関係と横の関係として捉えて、縦の関係を「/」で、横の関係を「+」で表して、数式の形式で表してはどうかと言うものでした。残念ながら先生のご提案はそこまでで、一般に使用されている文字の字形を「字式」で表すところまでには至りませんでした。

しかしながら『常用字解』の漢点字版を製作しようと言うとき、この「形」を何らかの方法で表現しなければいけないと言うことは、切羽詰まったものでした。それができなければ、この書物の漢点字版も成り立ちませんし、延いては視覚障害者と漢字との関係も、当時の現状のままの隔たりを超えることはできなかったものと思われまます。

そこで本会では、川上先生のご提案の「字式」をもう一步進めることにしました。漢字の構成を、縦の関係・横の関係という二つの関係ばかりでなく、漢字の構成を、構成要素の関係として捉えるとすればどのようなものになるのかを、一つ一つ洗い出すことにしました。このようにして、漢点字版では、漢字の「形」を「字式」として掲載することができたのでした。

現在進めております音訳版の製作は、この漢点字版で字形の説明が可能だという手応えを得て、初めて踏み出すことができたものです。当然のことですが、音訳版でも漢字の「形」の説明が求められます。そこでお集まりいただいた音訳者の皆様に、字形の説明に当たって、漢点字版の「字式」を参考にさせていただきました旨をお願いしました。

音訳に当たって、漢点字版の「字式」に使用されている記号の読みを統一していただくことを、音訳者の皆様にお願ひしました。

例を挙げれば、縦の関係を表す「/」は、「∴」のしに、「横の関係を表す「+」は、「∴」の右側に」と読んでいただくことをお願ひしました。

守 ㄥ／寸 ウ冠（のしに）寸
村 木偏十寸 木偏の右側に寸

このような記号をどのように使用するか、漢点字版製作に当たって、多くの試行錯誤を重ねましたが、そ

の例を二つほど挙げてみましょう。

冠 ㄥ冠／“元@十寸” ㄥ冠（の下に）元、
（その右に伸ばした脚の上に）寸

巫 人<工>人 工（の縦棒の左右に）人

「@+」は、音訳では「右に伸ばした脚の上に」と読んでいただくように、右下に伸びた線の上に何かを乗る形で、「冠」の形を何とか説明したいところから編み出した記号です。後にこの記号は、多くの文字に応用することができると分かりました。例えば左側に「九」がある字で、九の脚を伸ばしてその上に何かを乗せる形の文字（旭・植）と、脚を伸ばさないで右側に何かを置く形の文字（鳩）のように、右側に何かを置くにしても、伸ばした脚の上に置くか、脚を伸ばさないかを区別するのに必要なことが分かってきました。

「<」と「>」は、左右どちらかが大きいという不
等号を表す記号ですが、それを「小さい方」を「大き

い方」の中に入れるという意味として用いました。大きな枠の中に何かを入れ置く形の文字は、「門構え・国構え・行構え」という「構え」と呼ばれる部首がありますが、そればかりでなく、例に挙げました「巫」のような文字にも応用できることが分かってきました。これらも適宜、音訳者の皆様に読み方の統一をお願いしました。

このようにして漢点字版『常用字解』の字形の説明も整理できましたが、同時にそれが音訳にも充分生かされるのが、音訳者の皆様のご努力によって証明できましたことは、私にとって何よりの喜びと言わなければなりません。現在では音訳者の皆様は、「字式」を見て字形を説明するばかりでなく、新たに現れた文字の字形を、「字式」を使用して説明して下さるまでに至りました。このことは「字式」の一般化の一步を踏み出したことかと、将来に期待を抱いております。

以上、『常用字解』の音訳版の製作に当たっての音訳者の皆様のご努力と漢点字版との関係について述べてみました。

ご期待下さい。

点字から識字までの距離(一一五)

通所支援事業所へのサービス(五)

山内 薫

キッズサポートリマへの四回目の訪問

二〇一八年度は隔月で訪問できればという話になり、五月二八日の月曜日に第一回の訪問が決まった。前々日の土曜日が特別支援学校小学部の運動会だったためにこの月曜日はお休みで六人の小学生が参加、その内、言葉を話せるのは一人のみとのことだった。

図書館側の参加者はひきふね図書館職員三名、筑波大学大学院生のKさん、放課後等デイサービス事業所に勤務し、音訳もやっているRさん、そしてわたしの六名。(写真1)

実は、梅雨も近いので雨をテーマにしたお話し会を



写真1 訪問者の紹介

計画したのだが、所長から次のようなメールを頂いた。

「『出張おはなし会』（活動プランで、この名称を使わせて頂いております。勝手に命名致しまして、申し訳ありません）は何卒宜しくお願い申し上げます。テーマとして「梅雨」を御検討頂いていること、大変差し出がましいですが、「梅雨」ですと少々、子どもたちに理解しづらい・受け入れづらい感があります。

御存知のとおり、外出の際は車椅子利用の子どもたちが殆どであり、雨降りの際は、全身、車椅子ごと覆うような雨具を使う必要がある、また、湿気は呼吸器にも影響を及ぼすことから、子どもたちには辛い時期でもあります。

また、児童書に登場するような『傘』を使ったことの無い子どもたちですので、その点でも選書は難しいのではないかと、とも思います。当方からテーマとして提案させて頂ければ、お越し頂く二八日は、その二日前に小学生たちの運動会、次々週末の六月九日が中高生たちの体育祭という時期に当たることから、『運動

会』『運動』といったテーマではいかがでしょうか。

子どもたちは身体にハンディキャップはありますが、体を動かすことは非常に好きですし、何より、賑やかな場はとて好まれます。運動会の時期に絡めて、選書を御検討頂けますと有難く存じます。お願いのうえに、図々しいお願いを重ねますことを、お詫び致します。」

そこで、急遽テーマを「運動会」に変更して本を選び、持つて行くこととなった。

子どもたちの内、一人で座ることのできる子どもは一人で、その他の三人は大人の膝の間で身体を起こして聞き、もう一人は座位保持椅子に座っておはなしを楽しんだ。

初めに図書館からの訪問者の紹介があり、まずRさんが『うんどうかいがなんだ！』（作きむらゆいち、絵 大木 あきこ 新日本出版社）を読んだ。

次に私が『おやおやおやさい』（文 石津ちひろ、絵 山村浩二 福音館書店）の行事用大型絵本を読んだ。この絵本は十二種類の野菜たちがマラソン大会を繰り広げる絵本で、「にんきもののにんく きんに

く むきむき」 「ラデッシュ だんだん ダッシュユス
る」 「はくさい はくしゅは てれくさい」等々ペー
ジごとに簡単な言葉遊びによって展開する。

次は図書館員のSさんが『つなひきライオン』（作
まどみちお 絵 北田卓史 ひさかたチャイルド）、
次に筑波大学のKさんが、カエルたちが蛇で綱引きを
する行事用大型絵本『はなすもんかー!』（作・絵
宮西達也 鈴木出版）次に図書館員のOさんが『ぼく
かけっこはやいよ』作・絵 中谷貴子 鈴木出版）を
読んだ。（写真2）

その後は図書館から持ってきた運動会に関する絵本
を二十冊ほどフロアに並べてそれぞれ希望の絵本を讀
むことにした。

座位保持椅子に座ってい
た男の子は、赤塚不二夫の
さわる絵本『よーいどん』
（作・絵 赤塚不二夫 小
学館）にとっても興味を示
し、透明の樹脂インクで盛
り上がって印刷されている
線を職員と一緒にたどって



写真2 大絵本はなすもんかを見る

次々とページをめくっていた。

気管切開で呼吸器を付けている子は施設の職員に
『十ぴきのかえるのうんどうかい』（作 間所ひさこ
絵 仲川道子 P H P 研究所）を讀んでもらって、楽
しそうに声をあげて笑っていた。その後続けて二冊を
讀んでもらっていた。彼はこの日マルチメディアDA
I S Y 図書を含めて五冊の絵本を楽しんだ。

私は、横臥状態の子どもに iPad に収納されてい
るマルチメディアDA I S Y 図書『コツケモーモ
ー!』（作 ジュリエット・ダラスII コンテ 絵 ア
リソン・バートレット 訳 たなかあきこ 徳間書
店）を見てもらった。以前部屋を暗くしてマルチメデ
ィアDA I S Y 図書を天井に投影し、全員横臥状態で
見てもらったことがあるが、職員に抱きかかえられな
がら見るよりも楽な姿勢なので、絵本に集中できるよ
うだった。（なお掲載の写真は大部分省略されていま
すが、横浜漢点字羽化の会のホームページ[http://www.
ukanokai-web.jp/](http://www.ukanokai-web.jp/)には本文と共に全部が掲載されて
います。鮮明な写真を見ることができまので、是非
ご覧下さい。）

わたくしごと

こころの奥の押し入れ整理

木村 多恵子



(1) イギリスの古い伝説 おばけ

ある日おばあさんは散歩にでかけました。ふと、道端を見るときらきらと光るものがあります。「なんでしょうね。あら、金の花瓶だわ！まあきれなこと！うちへもって行きましょう。」おばあさんは散歩を続けました。ところが持っていた金の花瓶が銀の花瓶になっています。

「銀の花瓶でもきれいだからいいわ。」

もつと歩いていると銀の花瓶は鉄になりました。

「鉄になっただけ傘立てにいいわ。」

まだ歩いて行くとこんどはガラスになっています。

「まあガラスもきれいなわ。本立てにしましょう。

とてもきれいだわ！」

さて、まだ歩いているとそれは石になってしまいました。おばあさんはその石もとても変わった形なので、漬け物石にしようと思つてその石を持ち上げようとしたら、ひゆるひゆるひゆると煙が出ておばけにな

ってどこかへ消えてなくなりました。「まあ今日はおもしろい楽しい日だったわ、いろいろなものを見たし最後はおばけも見せてもらったわ。」

わたしはこの古いイギリスの伝説をなにかの本で読み、子供心に不思議に思った。きらきら光る花瓶が銀になり、鉄になってしまふ。おばあさんはなにできているか、と言うより自分がそれをどう楽しむかと考えている。鉄に変わったなら傘立てにしよう。

拾ったものは見た目には素材が変わり一見値打ちが下がったようでもおばあさんは最大限に自分にとって都合のよいものにする。鉄に変わったものは花瓶から傘立てにして使おうとする。

ところがそれはガラスになった。彼女は「ガラスもきれいなわ、本立てにしましょう」と思う。わたしもここでうれしくなった。

ところがさらに持ち歩いていると、それは石になってしまった。おばあさんの発想はすごい。「おもしろい形だから漬け物石にしよう」と考える。

心の豊かさが伝わってくる。いざあらためて持ちなおそうとしたらヒュルヒュルと煙が出ておばけになって消えてしまった。

おばあさんはこれらすべてをよろこび楽しんでイマジネーション豊かに見方を変えている。宝物を拾ったはずがつぎつぎに素材は一見価値がないように思われるがすべてを寛容に受け入れている柔軟さ。「おばけまで見せてもらったわ！」というおおらかさ。

本当はこんな平凡な理解ではおさまらない深い哲学が隠されているだろう。それでもわたしはこんなおおらかで懐深いおばあさんに惹かれる。ときどき引つ張り出して和ませてもらっている。

(2) 豚

ある日わたしはひとり歩いてきた。

ガガガガガー、ガガガガガー、と苦手な音が聞こえ始めた。「うん？道路工事？家の工事？いやだなあ」と思いながらも引き返すわけにはいかず突き進んだ。案の定道路の工事だ。比較的単純な道路舗装工事のようだ。現場に近づいてわたしは立ち止まった。さてどちらを選べばいいだろう、右端を通るか左にするか。すると「豚！はい豚」という外国人らしい男性の声。わたしはあまりの言葉にむっとした。ところがその男性はわたしの杖を持って障害物を避けさせようとして

いる。だがわたしはむっとしながら「杖は取らないで！」と言うと、彼はわたしの腕をつかんで障害物を避けさせてくれた。

本当はこんなにやさしくできる人なのになりたい誰がこんなひどい言葉を彼に教えたのだろう。わたしは悲しかった。けれども面倒をみてくれたことは間違いない。無事な位置に行つたときわたしは彼に「ありがとう、わたし豚ですか？」とにつこり（本当は頑張つて）笑つて言つた。むろん彼の応えはなかったが近くで監督か指導者かわからない女性が「すみません」と言つたがこれは単純に工事でご迷惑をかけてすみません、のようなマニユアル言葉だつた。

いったい誰がこんな言葉を彼らに教えているのだろう。この彼がわたしのようなものを豚よばわりするとも思えない。人を傷つける言葉をこんな場面に使うように教えた誰かがいるとしたら、懸命に働いている彼らはむしろ嫌われてしまう。そんな心ない言葉とは知らずに使っていたら、彼ら外国から働きに来ている人たちはかえつて反感をかい嫌われる。どうぞ指導者たちよ、先輩たちよ、品位のある言葉を教えてあげてください。

(3) 小さな小公子

わたしは5才のときから、横浜のアメリカ駐留軍の、たぶん比較的上級将校たちの個人住宅が並ぶ地域に近いところにある、全寮制の、盲学校で10年間暮らした。

最初はいちばん大きいお姉さんたちにお風呂にいれてもらい、洗濯物も全部洗ってもらっていた。

当然わたしも少しずつ大きくなるたびに、より小さい子の面倒をみるようになっていた。

一方、駐留軍将校の婦人たちの中には、親元から離された目の見えない子供たちをかわいそうに思った人たちもいたようで、ときどきお気に入り学院の子を見つけると自分の家へ招いておもちゃやお菓子を与えた。

あるときひとりの男の子が招待されてその家の子供たちと元気におもちゃで遊び、おやつを食べた。けれどもだんだんその子の元気がなくなりだした。将校婦人は心配しただろう。やがてその男の子は意を決したように「Do you like TOILET?」と言った。彼女はイエスともノウとも言わず「ふふふ」と笑った。彼はちよつとの間がまんしていたが、今度は「Do you

Speak TOILET?」を数回繰り返し、とうとう泣き出してしまった。小さなジェントルマンの彼にはいきなり「トイレ」と言うにはしのびなかったのだと思う。

おそらく招待を受けて彼がそのハウスへ行くとき、送り出す学院では彼に大事な言葉は教えたはずだ。けれども肝心なときにパニックを起こした彼は教わった言葉が出てこなくなってしまう。泣き出した彼の様子からやつとトイレに気付いた婦人も事なきをえたわけだ。

この話はわたしが中学を終えようとしている頃、学院内に広まったもので、当時は彼の苦境が手に取るようにわかり、いっしょに安堵した。現在のわたしはこのけなげな少年をいじらしく思い、母親のように抱きしめたくなる。当時のマザーもいじらしい彼を抱きしめたのではなかったか。自分をもっと早く気付いてやらなかった失敗も含めて日本滞在中の思い出の一場面に加えているかもしれない。

(4) 駐輪場

おおよそ2500世帯が住む集合住宅の一角に引越してからのことである。その建物の前の道が道幅が意外に狭く大きい自動車は通り抜けられず、つきあた

りにUターンできるほどの広いところが設けられている。そのお陰でこの建物に用事がある車以外は入ってこないのが猛スピードの車は比較的少ない。これはわたしにとつては大変ありがたい。

「わたしが最寄りの駅に行くには家を出て右に向かつて歩いて行く。右側、つまり建物側には何台も車が留まっていることがよくある。そして道の左側はずつと自転車が並ぶ駐輪場である。

よそから自転車できた人は一時的とはいえ入り口に置いてある。わたしはこれにひっかかり倒してしまうこともある。

わたしには自転車の構造がわからないので倒したものを起こして立ち上げることはできても独立たちをさせてあげられない。荷物を持っているときはさらに困難だ。つまりしつかり真ん中の道をまっすぐ歩かないと何台でも倒すことになる。

あるときずらりと並んだ自転車を倒してしまった。

荷物を地べたに置いてしゃがみこんで倒した自転車を起こそうとしたがへまなわたしはさらに2台3台と倒してしまった。1台でもわたしには重くて大変なのにそれらがからみついてもうどうにもならない。泣きそ

うになりながらどなたかご親切に手伝ってください方が通りかかってくださらないかなあと願う。1台だけ倒したときは仕方なく立たせてガードレールによりかからせていただいで、つまりちゃんとはなおせず離れてしまう。

またあるときは駐輪場のほうに曲がってしまい失敗した。座り込んで格闘していたら、左の方から「やりましたよ：：」と明るく爽やかな声が軽やかな足取りで近づいてきてくださった。「ありがとうございます。お願いします」とお願いします」とわたしは言った。そして「倒すのは簡単にできるのですけれど：：」と苦笑いしながら言うと、彼女もほがらかにわらってくださった。わたしの意図をすてきに受けてくださったうれしかった。

本当はわたしひとりできちんとなおすことができるようにしなければいけないと思うが、重たいものを起こすだけでも大変なのである。

その後自治会で申し合わせてくださったのだと思うが近頃ではよそから自転車でいらした方も駐輪場に並べて置くようになった。

みなさまありがとうございます。

漢文のページ

石に漱くちすすぎ流れに枕まくらす

孫楚少キ時欲スニ隱居セント。

謂ヒテニ王濟ニ曰フニ、「当ニレ欲ニ枕シ石ニ」

漱ガントレ流レニ、誤リテ云フニ漱ギニレ石ニ枕ストレ流ニ。

濟ハク曰ハク、「流ハ非ズレ可キニ枕ス石ハ」

非ズトレ可キニ漱グ。楚ハク曰ハク、「所ニ以ハ」

枕スルレ流レニ、欲スレバナリ洗ハントニ其ヲ耳ノ所ニ以ハ

漱グレ石ニ、欲スレバナリト厲カントニ其ノ齒ヲ。」

(蒙求、上、孫楚漱石)

『蒙求』もうぎゆう 先行する

書を掲げ、中から逸話を集める。その中から四字の書物を選び、その代りに本にも伝わり、その時に貴族の子弟の間に用いられた。



孫楚少そんそわかきとき隱居いんきよせんと欲ほつす。王濟おうせい

に謂いいて曰いうに、当まさに石いしに枕まくらし流れに

漱くちすすがんと欲ほつすといふべきに、誤あやまりて

石いしに漱くちすすぎ流れに枕まくらすと云いう。濟せい曰い

わく、「流ながれは枕まくらすべきに非あらず。石いしは

漱くちすすぐべきに非あらず。」と。楚そい曰いわく、

「流れに枕まくらする所以ゆえんは、其その耳みみを洗あらわん

と欲ほつすればなり。石いしに漱くちすすぐ所以ゆえんは、

其その齒はを厲みがかんと欲ほつすればなり。」と。

若い頃、孫楚は世を捨てて隠棲したいと

思いい友人の王濟に、石を枕にして眠り、

清流で口をすすぐような生活がしたいと

言いうべきところを、「石で口をすすぎ、流

れを枕にする」と言いつてしまった。

まけず言いうまちは「流れに枕するの

俗界で汚れた耳を洗うため、石で口をすすぐのは歯をみくためだ」と言いった。甚



孫 楚 少 キ 時 欲 ス 隠 居 セン
 ト 。 謂 ヒテ 王 濟 ニ 曰 フニ 、 キ
 ニ 当 ニ 欲 ストイフ 枕 シ 石 ニ
 漱 ガント 流 レニ 、 誤 リテ 云 フ
 漱 ギ 石 ニ 枕 スト 流 レニ 。
 濟 曰 ハク 、 「 流 レハ 非 ズ 可 キニ
 枕 ス 。 石 ハ 非 ズト 可 キニ
 漱 グ 。 」 楚 曰 ハク 、 「 所 以
 ハ 枕 スル 流 レニ 、 欲 スレ バナリ
 洗 ハント 其 ノ 耳 ヲ 。 所 以
 ハ 漱 グ 石 ニ 、 欲 スレ バナリト
 厲 カント 其 ノ 齒 ヲ 。
 ~ 厲 尸 、 がん だれ > 萬 、 まん み がく

※ 厲は、JIS第1・第2水準以外の漢字。
 「、」（ㄱ）は、ふり仮名などに前置するルビ符として使用。

夏目「漱石」の号は、この故事からとっています。

くちすす さす が
石で漱ぐなんて流石!?

そうせきちんりゅう
 「漱石枕流」の見事なこじつけから、
 「流石」と書いて「さすが」というよみ
 をあてるようになったといわれます。



参照図書：漢文名作選 第2集「6 故事と語録」大修館書店



一 新型コロナ・ウイルス・c o v i d ・ 1 9

本誌機関誌『うか』の発行も、今回の新型コロナ・ウイルスの流行の波を諸に受けて、その作業が行えない状態に屢々見舞われて、前号に引き続いて、誠に間遠となってしまいました。

しかしながらワクチンの接種の普及と、理由は明らかではありませんが、こここのところの感染者の減少に伴って、長く出されたままであった緊急事態宣言も解除されることとなり、取りあえず発行できそうだという感触を得ることができて、会員の皆様のご協力をいただいで、このように発行することができることになりました。

会員の皆様、大変ありがとうございます。

今後のことは予想がつきませんが、季刊の発行を目指して参る所存でおります。

どうぞよろしくお願い致します。

二 『萬葉集釋注』第十卷

この10年をかけて進めて参りました、伊藤博著『萬

葉集釋注』（集英社文庫）の漢点字訳も、今年が最後の第十卷（巻十九・卷二十）の製作となりました。全14分冊となります。

今年度の末までには完成して、横浜市中央図書館に納めさせていただく予定であります。

思い返せば漢点字の書物の製作の活動を始めるころ、ほとんど夢のように「萬葉集」の漢点字書ができたらと思つたことを思い出します。

それが今年いよいよ叶うと思えますと、誠に感慨一入というほかありません。

会員の皆様のご協力を、深く感謝申し上げます。

三 『常用字解』の音訳版

本会では約10年前に、『常用字解』の漢点字版を完成致しました。

漢点字版を製作しております内に、これは音訳も可能かもしれないという考えが、頭に浮かびました。それは、漢点字版で「字式」という方法で字形を表すことができて、これまで字形を理解することに困難を感じていた視覚障害者に、その道を開くことができた

いう手応えを感じたからです。

また現在の視覚障害者の多くが中途で視覚を失った方ですので、漢字の知識はお持ちでありながら、漢字の世界から引き離されるという境遇に置かれている方々です。このような方々に、音訳書としての漢字の解説書をお届けできるなら、何ほどか思考の羽ばたきを感受していただけるのではなからうかと考えました。

10年という年月を経て、この度本文の音訳が完了する運びとなりました。もう僅かではありますが、最後の仕上げという一山を超えなければいけません。

お集まり下さいました音訳者の皆様には、深く御礼申し上げます。

最後の登坂、どうぞよろしくお願い申し上げます。

四 『岩波古語辞典』

東京漢点字羽化の会では、『岩波古語辞典』を製作して参りましたが、この度「マ行」までの本文が出来上がりました。

これは電子版として、パソコンとピンディスプレイを接続して検索していただく方法で使用していただき

ます。

本文の残りの「ヤ・ラ・ワ行」も入力済んでおります。また古典の参考資料として必要な動詞・助動詞の活用表や、万葉仮名の一覧など、これまで視覚障害者には別世界の情報であったものも、今少しお待ちいただければお手にしていただけます。

ご期待下さい。



(23ページから続く) 談事の受付をしてくれるコンセルジュや、看護師が常駐し、緊急時にも対応してくれます。食事は3食とも館内のレストランでとることもできるし、自分で調理することも出来ます。

場所はJR相模線の上溝駅前ですが、相模線というのが単線のローカル線で電車の本数も少なく、あまり便利などころではありませんが、時刻表を確かめながら動くようにすれば、まあまあ生活は出来ます。

すぐ近くの橋本駅では、既にリニア新幹線の駅の工事が始まっているというのがちよつとした楽しみみです。

(木下 和久)

編集後記

やっと新型コロナウイルスの流行が、収まり始めたような様子を示してきました。20

19年の12月頃中国の武漢から発生したとされ、翌年の1月初めには緊急事態宣言が発出されました。それから何度も流行の波を越えて、やっと最近になって新規患者発生数がかんりの減少を示しているように見えます。このまま収まってしまうような生やさしいものではないかも知れませんが、緊急事態宣言が解除されたにもかかわらず、県や市の施設利用に関する制限は、なかなか解除されるような様子が見えません。関係者の皆さんはそれなりに警戒を緩めないようにしましょう。早く元の普通の状態に戻ることを期待するのみです。

私事になりますが、最近、シニアマンションに転居しました。いわゆる老人ホームよりは、元気な人達が生活することを期待している施設で、館内でのサークル活動なども活発に行われているようです。まだ入居して間がないので、詳しいことはこれからいろいろ分かってくるでしょう。いろいろな相（22ページ後段に続く）

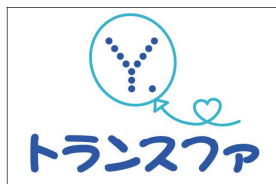
(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: www.ytrans.net

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1105

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は2022年1月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。

